

小倉百人一首練習帳 その一

MIT

一、秋の田の

《現代語訳》

秋は稲刈りの季節ですね。昔はコンバインなどの機械は無いので、全部穂先の部分だけを刈って、あとで殻をむいて米だけにします。その刈り穂（かりほ）を一時的に置いておく草ぶき小屋（仮小屋）の編み目の部分は、すき間だらけだから、夜露が入ってきます。その中で眠っている私の着物のそでは、夜露でべとべとにぬれています。

天智天皇

天智天皇が、そんな仮小屋で寝るわけはないですね。これは、農民の歌を天皇が上手に作り直したとも言われています。また、農民になりきって歌ったとも言われています。天智天皇は【大化の改新】を実行した立派な天皇さんなのですが、実は奈良地方の豪族たちとは、仲が悪かったのです。ですから、天皇家の本拠地である奈良県には、落ち着いて住んでいることができなかったのです。部下を連れて、あちこちと移り住みます。部下たちが仮の家を建ててくれますが、天皇が住むような立派なものをつくれません。そういう仮住まいの家がすき間だらけで、ひゅうひゅう風が入ってきて寒かった。露にぬれた。そういう経験をなされたのでしょう。こういう状況を詠んだ歌だ、と考える人もいます。

二、春すぎて

《現代語訳》

春はもう過ぎ去って、夏が来たようですよ。夏になると、白い着物を干すという天の香具山に、あんなふうに白い夏服が干してありますよ。ほら、ご覧になって。

持統天皇

香具山は、奈良県にある山です。畝傍（うねび）山、耳成（みみなし）山とともに、大和三山（やまとさんざん）と呼ばれています。また、世界ができたときに最初に神様が降り立ったという伝説の高天原（たかまがはら）にあったという山も、天の香具山と呼ばれています。白い布を干す伝説は、こちらの方です。この歌では、天の香具山は、両方の意味で使われています。

持統天皇は、天智天皇の娘で、おじさんの天武天皇のきさきとなります。天武天皇が亡くなったときに天皇になります。柿本人麻呂（かきのもとひとまる）とも仲が良かったようです。

三、あしびきの

《現代語訳》

昼間は仲良く遊んでいるという山鳥も、夜は別々に眠るといいます。そんな山鳥のとっても長い尾のような、長い長い秋の夜を、大好きなあなたは来てくれなくて、一人で眠らなくちゃいけないのかな。

柿本人麻呂

「あしびきの」は、【枕詞（まくら）とび】と呼ばれている短歌の技法のひとつです。「あしびきの」ときたら「山」が必ずつきます。「ちはやぶる」ときたら「神」ときます。こんなのがたくさんあります。とても全部は覚えきれません。

また、「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の」の三句全体で「ながながし」の序詞（じょご）とび・じょご）と呼ばれています。これも技法のひとつですが、枕詞ほどは使われません。

人麻呂は、万葉集の時期の代表的な歌人ですが、身分は高くありませんでした。歌のうまい人三十六人（三十六歌仙・さんじゅろっかせん）に選ばれています。

小倉百人一首練習帳 その二

MIT

四、田子の浦に

《現代語訳》

静岡県の駿河湾内に田子の浦（たごのうら）という浜辺があります。その浜辺に出て仰ぎ見ると、真っ白な富士山が見えました。その真っ白な富士山の立派な峰に、さらに雪が降り積もり続けていますよ。ああ、きれいです。

山部赤人

赤人も三十六歌仙の一人です。人麻呂よりは後輩の歌人で、とくに、景色を上手に歌いこみました。各地を旅しては、景色をほめた歌を詠（よ）んだようです。

「白妙の」は「富士」の枕詞です。

五、奥山に

《現代語訳》

人があまりやって来ない奥深い山にやって来た。みしみし、さわさわと、もみじの葉を踏みながら、鹿が鳴いている。その声を聞くと、ああ、秋って本当に悲しい季節なんだな」と感じます。

猿丸大夫

この人のことはよくわかっていませんが、三十六歌仙の一人です。菅原道真（すがわらのみちざね・天神さん・学問の神様）は、この歌を漢詩（中国風の漢字ばかりの詩）に訳して楽しんでいたりしています。

六、かざさぎの

《現代語訳》

中国の伝説では、七夕（たなばた）の夜には、かざさぎが翼を広げて天の川に橋をかけるそうです。そこを織姫（おりひめ）が渡ってけん牛と会うといわれています。天皇のお住みになる宮中の橋も貴（とうと）いので、かざさぎ橋と呼んでおきましよう。その宮中の橋に霜（しも）が真っ白におりています。夜もたいそうふけてしまっただんですね。

中納言家持

この人も三十六歌仙の一人です。大伴家持（おおとものやかもち）というのが本名です。大伴家は、文武（強いし頭がよい）にすぐれた家からです。お父さんの旅人（たびと）も有名です。家持は『万葉集』という、日本で一番古い歌集をまとめた人物だとされています。

七、天の原

《現代語訳》

中国に来てから、もう三十年以上になります。顔を上げて大きな夜空をながめてみると、月が出ています。私が日本にいたとき、奈良の春日にある三笠山（みかさやま）の上に月が出ていたのをよく見ました。この月は、その三笠山の月と同じなんでしょうか。

阿倍仲麻呂

阿倍仲麻呂は、十六歳のときに留学生として中国、当時は唐の国に行きました。唐の皇帝に仕えて三十五年。遣唐使が帰るとき、船と一緒に乗せてもらいますが、暴風にあい遭難（そうなん）します。遭難先から中国の都に戻りますが、日本に帰るのはあきらめず。その後、十五年ほど生きます。

私のホームページにもこの歌は載せてあります。探してみてください。

<http://www.5d.biglobe.ne.jp/~chick/china/china414.html>

練習帳11

小倉百人一首練習帳 その三

MIT

八、わが庵は

《現代語訳》

私の住んでいる粗末な家は、都の東南にあります。ええ、確かに山の中であり、鹿も住んでいますよ。でも、私も楽しく、しっかりと暮らしています。それなのに、世間の人は、私が一人寂しく暮らしている宇治山と呼んでいるそうです。「うじ」には「寂しい」「かなしい」という意味がありますからね。シャレですよシャレ。

喜撰法師

喜撰法師は、六歌仙(ろつかせん・歌のうまい六人)に選ばれていますが、いつ生まれいつ亡くなったのかは、よくわかっていません。「たつみ」というのは東南という意味です。昔は方角と時刻は「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥(ね・うし・とら・う・たつ・み・うま・ひつじ・さる・とり・いぬ・い)」で表していました。

「うぢ山」の部分は「宇治山」と「憂(う)し山」の意味を表しています。このように二つの言葉で二つの意味を表す表現を【掛詞(かけことば)】と呼んでいます。「憂し」とは「かなしい」「さびしい」という意味です。今で言うシャレです。へたくそなシャレをダジャレといいます。シャレの駄作なんですね。最近では「おやじギャグ」の方がわかりやすいかもしれません。しかし、掛詞はれっきとした表現技法で、歌の下手な人では、使いこなせません。

「しかぞすむ」の部分は「しっかりと住む」という意味なのですが、私は個人的な解釈として「鹿ぞ住む」という意味も訳して、掛詞としました。こちらはダジャレの部類に入るようなので、法師は掛詞にはしていないようです。すると作品の質が落ちますからね。

九、花の色は

《現代語訳》

長雨が降って、桜の花の色があせてしまいました。私も世の中のいろんなことや大好きな男の人のことで悩んでいるうちに、長い時間がたってしまいました。その間、ぼんやりと長雨を眺めながら時間をすごしてしまっただようです。そうしているうちに、私のお肌のぴちぴち感とか、若さとかも色あせてしまいました。

小野小町

小野小町は、六歌仙、三十六歌仙に選ばれています。かなりの美人だったというわけで、在原業平の恋人という伝説がある。

「花の色」は「桜の花の色」と「小野小町自身の容姿」の掛詞。「よにふる」の「よ」は、「世の中」と「男女の仲」の掛詞。「ふる」は「雨が降る」と「時がたつ」の掛詞。「ながめ」は「長雨」と「眺め」の掛詞。

掛詞がやたらと多く、「その他【縁語）えんご】」「【倒置法）とつちほつご】」というテクニク満載で、「ちやちやしすぎと批判したくなるのだが、詠んでみると意外とすっきりしている。魔法のような歌。」

十、「わね」の

《現代語訳》

これがあの、東の方に行く人も、東から都に帰ってくる人も通る逢坂の関です。ここでは、知っている人も、知らない人も、会っては別れ、別れては会うということが繰り返されています。

蝉丸

皆さんは、坊主（ぼうず）（めくりをしたことがありますか。百人一首のカルタを全部裏返しにして、一人一枚ずつめくっていくのです。カルタは「官人」「姫」「坊主」に分けられていて、坊主をめくとピンチになるのです。蝉丸さんは、法師とかついていないので、坊主がどうかわかりませんでした。多分坊主らしいということをやっていました。私が小学校のときの話です。

「あふ坂の関」の「あふ」は「会う」という意味と、「逢坂の関」の「逢」の掛詞です。「行く」「帰る」は、反対の意味の言葉です。こういっのを重ねるのを【対句（ついで）表現】と呼んでいます。

練習帳三

小倉百人一首練習帳 その四

MIT

十一、わたの原

《現代語訳》

遣唐副使になりましたが、遣唐大使との意見の違いで船に乗れませんでした。結局は天皇のご命令にそむくこととなり、隠岐（おき）の島へ流されることになりました。その出発のときが来ました。たくさんの島が点々とある大海原（おおうなばら）へ船をこぎ出し、出発して行つたと、都にいる私の大好きな人に伝えてくれよ。漁師の釣り舟。

参議篁

本名は「小野篁」です。参議（さんぎ）は朝廷内での役職の名前です。現代語訳に入れておきましたが、罪びととなって島流しの刑にあつことは、歌だけではわかりません。この歌の前に【詞書（ことばがき）】というのが書かれていて、そこから歌を詠っている状況がわかります。

彼は、隠岐の島で二年過ごした後に、罪を許されます。都に戻り朝廷に復帰します。

「釣り舟」に「伝えてくれ」と頼んでいます。人ではないものや動物を人間並みに扱うことを【擬人法（ぎじんぼう）】といいます。

十二、天つ風

《現代語訳》

宮中では、舞姫たちによって五節（ごせち）の舞が行われています。天武天皇が吉野の滝の宮で琴をお弾きになったとき、天女（てんによ）が舞い降りて、袖を五度ひるがえして舞つたそうです。舞姫たちも天女のように、舞い終わったら天に帰ってしまうかもしれません。大空を吹く風よ、雲の間の天に通じる道を閉ざしてくれ。この舞姫たちを、もうちょっとここに引き止めておきたいから。

本名は「良岑宗貞（よしみねのむねさだ）」。京都に平安京をつくった桓武天皇の孫。六歌仙・三十六歌仙の一人。三十五歳のときにお坊さんになりました。

「歌のテクニクは抜群だけれど、本当の心が表現されていない」と、紀貫之は書いています。

現実の舞姫を、伝説の天女に置きかえて歌を作っています。このように何かを別のものに置きかえる技法を【見立（みたて）】と呼んでいます。

十三、つくばねの

《現代語訳》

茨城県に筑波山という山があります。この山は男体（なんたい）という頂上と、女体（によたい）という頂上があります。そこから流れ出す川は、男女川（みなのがわ）と呼ばれています。

少ない量の水が、どんどんたままって深い淵（ふち）をつくるように、私の恋心もだんだん積もり積もって、どうしようもないようになってしまいました。

陽成院

筑波山は茨城県にある山で、八七六メートルと、それほど高くないのですが、関東地方の名峰です。女体山の方は、古代といわれる時代に、合コンの場所だったという事です。

院（いん）とは上皇（じょうこう）のことで、上皇は天皇を引退した方です。十歳で天皇になられますが、二十歳の頃にはもう、引退しています。精神病が原因だということ。弟の貞純親王は、後に武士となる源氏の先祖です。

「くひ」というのは「水」という意味も表します。「恋」という意味は当然あります。ですから【掛詞】ですね。

「淵」というのは、川の中でもあまり水流が速くなくて深いところ。水が動かずによどんでいます。逆に「瀬（せ）」というのは、水流の速いところ。

この一首を詠むと、「ぬるぬる」とした滑らかな「み・み・も」というマ行の音が多いからだと言われていました。

練習帳四

小倉百人一首練習帳 その五

MIT

十四、みちのくの

《現代語訳》

東北地方の信夫（しのぶ）の土地は、忍ぶ草の産地で、その草を使ったすり染めで有名になりました。乱れ模様のすり染めのように、私の心も思い乱れ始めてしまいました。他の誰のせいでもなく、あなたのおかげでね。

河原左大臣

嵯峨（さが）天皇の皇子で、源融（みなもとのおる）という名前をもらって、一般人になりました。当時の天皇は神様で、天皇の一族の方々も人間ではありませんでした。皇族から一般人になることを「臣籍（しんせき）に下（くだ）る」といいます。臣下（しんか・家来のこと）になるのですね。そのときに姓名をもらいます。

左大臣というのは、朝廷（政府）の役職の名前です。太政大臣の次にえらい職です。彼は、東六条の河原院（かわらのいん）に住んでいたので、河原左大臣と呼ばれました。

十五、君がため

《現代語訳》

あなたのために、春まだ浅い野に出て、若菜を摘（つ）み取っています。ああ、雪が降ってきました。私の袖に、雪がどんどん積もっていきます。

光孝天皇

第五十七代の天皇。ご幼少より聡明で、この歌は皇子のときに詠われました。わかりやすいすつきりとした歌。

七草粥（ななくさがゆ）は、「存知ですか。「なすな・すずな・ほとけのび・せり・すずしろ・はく入・ごぎょう」の七種類の菜で、おかゆを作ります。「すずな」「かぶ」、「すずしろ」は「大根」のことで、その葉っぱを食べます。

十六、立ちわかれ

《現代語訳》

因幡（いなば）の国、鳥取県の知事に任命されたので、行かなければいけません。お別れです。でも、因幡の山（稲葉山とも）に生えている「松」と同じ音の「待」
とあなたが言ってくれたなら、すべてでも帰って来ますよ。

中納言行平

阿保親王の子供で、在原行平（ありわらのゆきひら）。業平（なりひら）の兄。
中納言は朝廷での役職。

「いなば」「はく」「いなばの山」と「行けば」と同じ意味の【掛詞】。

「まつ」「はく」「松」と「待」の【掛詞】。

あまり行きたくなさそうな気持ちが伝わってきます。

十七、ちはやぶる

《現代語訳》

竜田川一面にもみじが流れています。紅葉が川をしばらく染めにするなどという
とは、神の時代にも聞いたことがないです。まったく。

在原業平朝臣

六歌仙・三十六歌仙の一人。「ちはやぶる」は「神」の【枕詞】。

一句と二句が、本当は最後に来る。【倒置法（とじちほつ）】が使われている。

感情を入れすぎの歌が多いと評価される。

小倉百人一首練習帳 その六

MIT

十八、すみの江の

《現代語訳》

大阪湾の住の江の岸に打ち寄せる波。寄せるという意味の「寄る」は「夜」に通じます。そんな夜の夢の中でさえ、人目をさけるように、あなたを恋しているのです。もつと堂々としていたのですが、どうしてでしょう。

藤原敏行朝臣

三十六歌仙の一人。当然、歌はうまいのですが、書道も極めていっています。字が大変にうまかったということですが。

「すみの江の岸による波」は第三句の「よる」の【序詞】。

十九、難波潟(なにはがた)

《現代語訳》

大阪湾の難波潟に生えている芦(あし・葦)の節と節の間は、とても短いですが、そんな短い時間でさえも、あなたに会わないで、この世の中を暮らして行けとおっしゃるのですか。

伊勢

伊勢という名前は、父親の伊勢守(いせのかみ)藤原継蔭(つぐかげ)の職名からきています。伊勢守は三重県知事と思えばわかりやすいでしょう。当時の女性は特に名前はなく、「**」の女(むすめ)「や父親の職名で呼ばれていました。伊勢も三十六歌仙の一人です。

難波潟は、十八の歌の住の江の近くです。

「難波潟みじかき苔の」「は、」「ふこのま」の【序詞】。

「ふじのま」は「芦の節と節の間」という意味と「短い時間」という意味の【掛詞】。

「あはで」は「会わないで」という意味。

「世」も「世の中・一生」と「男女の仲」という意味を二つ持つ【掛詞】。

恋の歌が多いので、小学生の方にお話するのはためらわれますが、やると決めた以上は伝えていかないと。冷たい男性に、「会いに来てよ」と言っているのですね。

二十、わびぬれば

《現代語訳》

あなたに会えなくて落ち込んでいます。もう、こうなったらどうなってもかまいません。難波潟にある溲標（みおつくし）の名前のように、この身を捨てても、あなたに会いに行きます。ええ、行きますとも。

元良親王

陽成（ようぜい）天皇の皇子。陽成天皇のあと、天皇は別の系統に移ってしまいました。元良親王は、その天皇の奥さんの一人に恋をしていますが、そのことが世間に知られてしまいます。人妻、まして天皇の奥さんです。ただではすみません。

第二句で「いまはたおなじ」「もうおなじです」と言い切っています。このように二句と三句の間に、特にながりはありません。このような歌を【二句切れ】の歌だ、と呼んでいます。

「難波なる」は「みをつくし」の【枕詞】。「なる」は「にある」という意味。

「みをつくし」は、船の航行を助ける目印の杭（くい）という意味と、「身を尽くす（身を捨てる）」という意味の【掛詞】。

歌の内容は、「ええーい、もうどつどつでもなれ」と自暴自棄（じぼつじき）やけくそですが、歌の技術は、落ち着いた冷静さがあります。

今流行の「純愛」でしょうか。それとも「不倫」？。

いずれにしても、「教えない方がいいのでは？」と悩む歌の一つです。でも、まかさず正面から行きました。